

戦後の東プロイセンのソヴェエト化

——第二次世界大戦の帰結によせて——

ユーリー・コスチャシヨーフ

橋本伸也訳・解題

【著者紹介と解題】

以下に掲載するのは、ロシア連邦の飛び地カリーニングラードにあるイマニユエル・カント・バルト連邦大学人文科学部のユーリー・コスチャシヨーフ教授が、二〇一五年一月二六日に関西学院大学文学部で行った招聘講演「いかにしてドイツのケーニヒスベルクはロシアのカリーニングラードになったのか？」の内容を、コスチャシヨーフ教授自身が改題のうえ論文形式に改稿したものである。コスチャシヨーフ教授は、訳者を研究代表者とする国際共同研究「東中欧・ロシアにおける歴史と記憶の政治とその紛争」が、京都大学人文科学研究所の共同研究班「現代／世界とは何か？——人文学の視点から」などの研究プロジェクトとともに開催した国際会議「歴史と記憶の政治とその紛争——ユーラシア東西の対比と対話——」（二月二八日・二九日、関西学院大学文学部）のために来日された。折角の機会でもあり、関西学院大学の学生を対象とした講演をお願いしたところ、快く受諾してくださった。講演内容は、歴史記憶やアイデンティティの政治に関わる近年の研究動向を意識しながら、画像史料を駆使しつつカリーニングラー

ド現代史の概要を手際よく提示するものであった。第二次世界大戦の戦中・戦後の国境線移動と中世以来の住民であるドイツ人の強制追放、ソ連各地からの組織的移住によって、文字通り急ごしらえで人為的に作りだされた空間であるカリーニングラードの最初期の様相は、かつて豊下楯彦法学部教授（当時）を代表者とする関西学院大学・大学共同研究「沖繩とカリーニングラード——周縁地域の自立／従属と地域秩序構築をめぐる比較現代史——」（二〇〇九・二〇一〇年度）の成果として簡単に紹介したことがある。①だが、より長期的な実相の紹介は日本ではまったくないことから、現代史研究上の空隙を埋めるためにも、コスチャシヨーフ教授にさらにお願ひして、講演内容を論文文化して『関西学院史学』誌上に掲載することとした。教授のご理解とご尽力に心よりお礼申し上げたい。訳出した本文の掲載に先立ってここでは、コスチャシヨーフ教授の経歴と業績を紹介しながら、日本ではほとんど注目されてこなかったカリーニングラードの歴史にあえて光を当てる意義について簡単に論じておきたい。

コスチャシヨーフ教授は、一九五五年、シベリア中部にあるケメロヴォ州の小都市ユルガで生まれた。一九七二年にはモスクワ大学歴史学部に入學し、学士課程および大学院では南スラヴ・西スラヴの歴史を専攻、セルビア史に関する論文で准博士（ソ連・ロシアの学位制度は西側とは異なり、准博士は近年の日本の課程博士に近い位置づけで、さらに上位の学位として博士号がある）の学位を取得した。一九八一年には当時のカリーニングラード大学に助手として採用され、准教授を経て、一九九九年からは正教授職にある。同年にはモスクワ大学から、ハプスブルク帝国支配下にあった一八世紀のセルビア民族の歴史にかんする学位請求論文により博士号を授与された。

カリーニングラード大学着任後のコスチャシヨーフ教授は、セルビア史とならんで、カリーニングラードと東プロイセンの地域史にも関心をよせるようになり、ペレストロイカ期の自由な雰囲気にあった一九八八年からは、若手教員や学生とともに第二次世界大戦後のソ連内地からの移住者を対象としたオーラル・ヒストリーのプロジェクトを組

織した。その時点でカーリーニングラード州に暮らす第一世代の移住者三二〇名を対象としたこのプロジェクトは、それまで「ファシストの巢窟、東プロイセンに果敢に乗り込んだソヴィエト英雄」として神話化された初期の移住者たちの実相と生きた経験を掘り起こしたという点で画期的なものであった。訳出した本文からもうかがえる通り、実際の移住者たちは神話的な英雄像からはほど遠く、およそみずからの経験を書簡や日記、回想として詳しく書き残せるような人びとではなかったから、オーラル・ヒストリーは、ソ連期の公式文書からはけっして捉えられない日常生活や社会史としてのカーリーニングラード史を成立させるのに不可欠の方法となった。エゴ・ドキュメントが乏しいなかでのオーラル・ヒストリーの有効性は、近著『戦後農村の日常生活』の序論でコスチャシヨフ教授自身が強調してやまぬところである。後掲論文では、移住者たちの経験と見聞が淡々と書き連ねられているが、たとえば、見なれぬ花が美しく植えられた庭や赤瓦葺の切妻屋根に目を見張ったといったさりげない記述のひとつひとつが、粘り強いオーラル・ヒストリーの成果なのだ。だが、英雄像とはかけ離れた人びとの実相に迫るこのプロジェクトは、イデオロギー的制約が解けたソ連解体後も政治的に危険視されかねないものだった。実際、その成果は、当初一九九二年に刊行予定だったにもかかわらず、州内の政治的理由や出版社の自主規制のために頓挫し、断片が一九九六年に発表された以外は、まずはドイツやポーランドの雑誌上で公開され、やっと二〇〇二年になってロシア語版が出るという経緯をたどった^③。

オーラル・ヒストリーの成果に加えて、移住者の出身地域とカーリーニングラードの双方の文書館での入念な史料調査によって得られた豊かな知見は、コスチャシヨフ教授の二冊の単著、すなわち『カーリーニングラード州秘史』^④および『戦後農村の日常生活』としてまとめられている。前者はカーリーニングラードの地方出版で、戦後初期から一九五〇年代までのカーリーニングラードにおける「ファシスト・ドイツ」表象とプロイセン・ドイツ的精神文化の破壊、

スターリンが吹聴した「スラヴ人の土地としての東プロイセン」テーゼの古文書学者や考古学者による追認、カントの墓が破壊を免れた顛末、カリーニングラードにおける「ロシア文化」の創出といった文化史的問題から、移住民の形成した地域の社会的相貌、新たに組織されたコルホーズ集会での軋轢、共産党および行政当局による権力創出過程、カリーニングラードをめぐるイデオロギーにいたるまでのきわめて多岐にわたる論点に及んでいる。特筆すべきは、ソ連各地からの移住の組織化過程についての克明な叙述（その一端は、以下に訳出した論文からもうかがえる）と並んで、中世以来の東プロイセンの住民であるドイツ人住民の強制追放について、ソ連／ロシアに残された乏しい文書館史料をもとになんとか再構成したことである（当該部分は注①の「ドイツ人追放」として訳出・刊行済み）。第二次世界大戦後のドイツ東方領土からの大量強制移住をはじめとした人の移動、いわゆる被追放民と民族浄化についての関心の高まりが、多くの知見の蓄積をもたらしているとはいえ、^⑤ソ連統治下に置かれた東プロイセンについてはほとんど情報が得られてこなかった。そうしたなかにあつて当事国のドイツでも、コスチャシヨフ教授の研究成果は注目され、参照されている。^⑥冷戦期に不可視化された戦時下・戦後期のドイツ人の悲劇的経験の記憶が、ポスト冷戦期の歴史記憶の変容のなかで再浮上させられてきたわけだが、プーチン・メドヴェージェフ政権の歴史政策のもとで自己愛的な「大祖國戦争」史観が横行しがちのロシアで、追放されたドイツ人の経験に公正に向きあおうとするコスチャシヨフ教授の姿勢は貴重だと言わなければならない。

他方、後者の『戦後農村の日常生活』は、すでに一〇〇巻を悠に超えた『スターリン主義の歴史』シリーズのうちの一巻として、モスクワで刊行されたばかりの著作である。前著でも扱われたカリーニングラード州の農村における新しいコルホーズの形成過程を、やはりオーラル・ヒストリーの成果に加えて文書館での徹底した史料調査に基づき描いたこの農村研究は、たんにカリーニングラードという特殊な地域の歴史にとどまらず、集団化以降のソ連農村史

研究としても重要な意味を有するものであろう。州内の各コルホーズと党組織の集会議事録や管理記録、貼りだされた壁新聞、あるいは労働の様子を伝える写真などの豊富な史料を駆使したこの徹視的研究は、その内部に渦巻いた葛藤や権力闘争の実相を、もちろん声高な暴露や非難ではなく、淡々とした誠実な歴史研究の成果として浮かびあがらせている。日本のドイツ農業史には、足立芳宏『東ドイツ農村の社会史——「社会主義」経験の歴史化のために——』（京都大学学術出版会、二〇一一年）という、東ドイツにおける被追放民による農村形成についての特筆すべきみごとな労作がある。まったく異なる文脈で書かれていながら、直接のつながりを有するこれら二著を対質させることで、第二次世界大戦後のヨーロッパ東部の歴史的経験をより豊かに理解できるだろう。故郷を追われて東ドイツの農村に転がり込んだドイツ人たちと、やはり故郷を離れて、ドイツ人の姿の消えたカリーニングラードで営農したソ連諸民族の人びとの経験の共通性と差異を捉えることは、二〇世紀という時代を考えるうえで、不可欠の作業のほずである。

訳出した講演／論稿は、これら二著として結実したコスチャシヨフ教授の多年にわたる研究成果のエッセンスを、ごく限られた紙幅のなかに凝縮させたものである。小難しい理論的考察を振りかざして長広舌をふるうことは一切なく、残された記録と証言から確認される事実のみを淡々と積み上げる歴史学的手法はここにも貫かれているが、叙述対象の選択や用いられた形容辞からは、過去に向き合う際のコスチャシヨフ教授の真摯で公正な態度が感得されるだろう。講演からの改題・改稿に際して付された「第二次世界大戦の帰結によせて」という副題も、事情を知らなければ見過ごしそうだが、きわめて意味深長である。というのもプーチン・メドヴェージェフ政権は、対外的な歴史政治のなかでポーランドやバルト諸国など対立する近隣諸国を糾弾するために、「第二次世界大戦の帰結を受け入れようとするな」という決まり文句を頻用しているからである。あまり気づかれていないが、対日関係でも、とくに

領土問題に関連してしばしばこの語が発せられている。^⑦しかるに、コスチャシヨーフ教授の付した副題には他者への攻撃的意図は認められず、むしろみずから暮らし研究対象とする地域の歴史的現実を、そこに含まれた深刻な矛盾や葛藤ともども、「第二次世界大戦の帰結」として受け止める態度が読み取れる。このような転用は多義的に理解可能だが、あえてこのような副題を付したコスチャシヨーフ教授の意図は深く受け止められるべきものだろう。ちなみに、愛国主義的気分に浸りきったロシアのナシヨナリストたちはこうした態度への苛立ちを隠そうとせず、カリニングラードのネット空間では、他の何人かの地元歴史家たちとともにコスチャシヨーフ教授も、「ロシアの敵」という悪罵を投げかけられている。歴史家の受難の時代は、世界規模のことなのである。

こうした公正な態度との関連で最後に、コスチャシヨーフ教授がとくに力を入れてきたポーランド及びドイツの大学との学術・教育交流について紹介しておこう。

イマニユエル・カント・バルト連邦大学は、ポーランド中北部のトルン（コペルニクスの生地として知られる）、ドイツのフランクフルト・アム・オーデル（ポーランドとの国境の街で、西部の大都市フランクフルト・アム・マインとは異なる）の大学とともに「トリアローグ」と呼ばれる大学間協力プログラムを締結して、各大学の学生と教員が参加するサマースクールなどによる交流とあわせて、「オーデル川とネマン川のあいだで」を主題とした共同研究を組織してきた。その成果はすでにドイツ語・ポーランド語・ロシア語による著作として公刊された。^⑧いうまでもなくオーデル川とネマン川は、第二次世界大戦の戦中・戦後におおきく変更された国境線に沿っており（現在、オーデル川はドイツ・ポーランド間、ネマン川はカリニングラード州とリトアニアとの国境である）、境界線をめぐる記憶の差異の確認と共有が、国境を超えた大学間協力による共同研究の主題となったのである。歴史と記憶をめぐるヨーロッパの国家間対話は、ドイツ・ポーランド間、ドイツ・フランス間の経験をもって必要以上に美化して語られているが、実際には、そ

の東部の二国間対話、とりわけロシアも関与したそれは、あからさまな対立も含めて、日本で考えられている以上に複雑な様相を呈している。しかるに国家間ではなく地域を単位とした三者間対話からは、国家単位の二国間関係とは異なる成果が生まれているようである。^⑨ コスチャシヨーフ教授の研究成果を読むにあたっては、そのような地域間協力への意思も想起しておきたい。

訳者

* * *

ドイツの一地方である東プロイセンを一部ソ連に移譲する問題が最初に検討されたのは、一九四一年二月にモスクワで行われた英ソ「外相」会談の際のことである。この時、ソヴィエト側が、対独戦争によりソ連の被った損害への補償を目的に、ケーニヒスベルクを含む東プロイセンの一部を二〇年の期限付きでソ連側に引き渡すよう求めたの^①だ。二年後の一九四三年、イギリス・ソ連・アメリカ合衆国首脳によるテヘラン会談で将来のポーランド国境が論議された際には、スターリンはこう明言した。

ロシア人はバルト海に不凍港を持っておりません。したがってロシア人には不凍港であるケーニヒスベルクとメーメリ、さらに付随する東プロイセン領の一部が必要になるでしょう。いわんや歴史的にはこれらは、古来、スラヴ人の土地なのです。^②

チャーチルはこの提案を検討すると約束し、その後のスターリン宛書簡で「ロシア側の主張の正当性」⁽³⁾を認めた。最終的には、一九四五年の三大国首脳によるベルリン会議（ポツダム会議）のプロトコルで、「ケーニヒスベルク市およびこれに隣接する地域のソ連への移譲を求めるソ連政府の提案に原則的に」⁽⁴⁾同意した旨が確定された。

この決定は、来るべき講和会議で最終調整することになっていた。まもなく始まった「冷戦」のために、ソ連も参加した講和会議は開かれなかったとはいえ、国際社会でポツダム決定の合法性に疑義が呈されることはなく、一九七〇年のドイツ連邦共和国「西ドイツ」とソ連とのモスクワ協定、一九七五年の欧州安全保障協力会議（OSCE）の最終文章「ヘルシンキ宣言」、さらに一九九〇年のソ連、アメリカ合衆国、イギリス、フランス、ドイツ民主共和国「東ドイツ」およびドイツ連邦共和国とのあいだの多国間協定でも、戦後ヨーロッパの境界線は揺るぎないことが確認された。

併合されたドイツの一地方のソヴィエト化はかなり複雑な過程に置かれていて、数年にわたって継続し、一連の制度的変更や措置を含んでいた。

ドイツの遺産

大戦前の東プロイセンは、いわゆるポーランド回廊で他の領土からは切り離された、ドイツ最東部の地方であった。ここには一三世紀以来、ドイツ人のチュートン騎士修道会国家があり、これは一六世紀に世俗的なプロイセン公国に姿を変え、その後、プロイセン王国の一部、最終的には一八七一年に統一されたドイツ帝国の一部となった。この間の七世紀を通じて、ドイツの世界とドイツ文明の一部だったのだ。東プロイセンは騎士団の城でよく知られてお

り、そのうちのいくつかは今日まで、基本的にはポーランド領内に残されてきた。中世の煉瓦造りの城郭として世界最大のひとつで、かつてチュートン騎士団の指導者である総長の居城であったマリエンブルク城、ポーランド語ではマルボルク城もこれに含まれる。この地域の建築が醸し出す雰囲気は、主として数多くの美しい聖堂のおかげで生まれたものだった。東プロイセンには、高度に発達した農業と工業も存在した。

戦争の最終局面でこの地域は甚大な被害を被った。最初の一撃をもたらししたのは英米空軍である。一九四四年八月末の数日間に、ケーニヒスベルクだけで約四万発の爆弾が投下されて五〇〇人以上が死亡、数万人が棲家を失った。東プロイセンの州都は、一九四五年四月の赤軍による市街戦でもひどい損害を被った。市中心部は事実上壊滅状態で、市全体でも住宅、公共機関、工業関連建物の損壊は六〇パーセント以上にのぼった。東プロイセンの他都市の多くも廃墟と化し、工業、運輸、農業、土木・治水関連施設もきわめて甚大な被害をうけた。⁽⁵⁾

三六四あった工業関連企業のうち全壊は一八六件、それ以外にも手痛い被害にあった。地域は闇に包まれた。発電所が破壊され、送電線も倒壊させられたのである。戦闘が進むと、ネマン川や砂州沿いのダムや堤防も破壊され、そのために数百平方キロメートルもの埋立地（海水面より低い）が水没した。不発弾も深刻な問題だった。戦後最初の数カ月に軍人たちが一七万五〇〇〇発の地雷と二〇〇万発の砲弾を処理したが、都市でも農村でもさらに長期にわたって爆発音がとどろき続いていた。

赤軍の戦利品獲得部隊による分別のない活動も、地域経済に多大の被害をもたらした。これらの部隊は、工業設備を解体撤去して「ソ連」に送り出し、企業などの備品、化粧タイル、煉瓦、街路の敷石その他、価値のありそうなものをかき集めて運びだした。周知の通り、この地域は、戦後はソ連統治下に移管されることになっていたのである。

最初のソ連移住者たちの目にとび込んできたのは、歪んだ鉄路、ばくだいな数の戦車その他の破壊された武器、打ち捨てられた大砲、果てしなく続く塹壕、破壊しつくされたトーチカであった。各地の鉄道駅には鉄柱だけがぽつんと立っていて、周囲には焼け焦げた煉瓦の山があった。ケーニヒスベルクでは、破壊された中央駅から街中心の広場まで建物はなく、あつたのは焼け落ちた建物の残骸であり、ときおり壁面が二・三面残されているだけだった。人の姿もなく、車や生き物もおらず、住民に見捨てられた死の街という印象だった。⁽⁶⁾

ソ連による行政の開始

戦闘終結後の一年間、ソ連の手に渡った東プロイセン北部で唯一の権力は軍部だった。一九四五年夏に特別軍管区が設置され、実権は軍の司令官や守備隊長たちが掌握しており、かれらはまるで我が物顔だった。軍部が多くの都市や村々を領有し、それ以外でもましな建物や住居を占拠しただけでなく、「自分たち」の居住区を違法な監視所や遮断機で民間人から隔離した。この臨時統治機関は、軍隊本来ではないものも含めて、広範囲の任務を果たさねばならなかった。現地ドイツ人住民の暮らしの統制、公共事業、工場の稼働、農業労働の組織化などである。赤軍将校は戦うには長けていたが、軍隊的統治法を民生部門に適用するのは不得手だった。軍当局には、この地域に暮らし始めた民間人の移住者は気にそまなかった。軍司令官たちの傍若無人ぶりをモスクワに訴えることがよくあつたからである。

行政システム再編と軍政から民政への移行は、一九四六年春に始まった。ケーニヒスベルク軍管区が解体されて、代わりにロシア・ソヴェエト連邦社会主義共和国の一部としてケーニヒスベルク州が設けられ、同時に、国防省では

なくロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国大臣會議に服属する臨時文民權力機関として、民政局の設置が開始された。

一九四六年六月にはモスクワで、ケーニヒスベルク州にソヴィエト法を施行し、すべての土地・銀行・工場・運輸通信手段・公共施設を国有化する政令が採択された。これにより、「特別管区」をロシア共和国の通常の行政主体に転換する法的基盤が整えられた。とはいえ軍から文民への權力移譲には一年以上を要し、軋轢も少なからずあった。将校たちは、自分たちの独占的な權力と財産をなかなか手放そうとしなかったからである。

一九四七年春には、ソ連の政治システムの基礎である各級共産党委員会が組織された。立憲主義的統治への移行過程は、最終的には一九四七年一月に完了した。地方レベルの權力機関である各級勤労者代議員會議の最初の選挙が行われたのである。

カリニングラード州への移住

軍人以外で旧東プロイセン最初のソヴィエト人住民になったのはいわゆる引揚者、つまり戦時期に労役のために、占領下のソ連諸州からドイツへとファシストによって連れだされた人々である。かれらの故郷への帰路は東プロイセンを通っていた。どこにも戻るところのなかった引揚者の一部は、引き続きプロイセンに暮らすことになった。カリニングラード州への大量移住は、一九四六年七月九日付でスターリンの署名した政府決定で決められた。この決定は、一九四六年末までにロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国内の二三の州・自治共和国とベラルーシから一万二〇〇〇家族を自発性に基づいて移住させることを定めていた。

移住を奨励するために、一連の特典が設けられた。たとえば旅費の無償と資金援助である。また各家族は、アパートまたは戸建住宅を〇・五ヘクタールの土地付きで個人所有することが認められ、住居の建設・修繕と家畜取得のための無利子貸付も供与された。各家族には、国定価格（つまり低額）の穀物や商品一式の販売も決められた。衣服と靴、布地三〇メートル、灯油一〇リットル、塩一〇キログラム、石鹼一キログラム、マツチ四〇箱などである。また、移住者は三年間すべての税金を免除された。工業その他の経済分野で就労するための勤労者の都市移住について政府が同様の決定を行うのは、すこし後のことだ。

計画では、移住は二人以上の就労可能者のいる「家族」単位とされていた。しかし実際には、いわゆる不完全家族（子どもと片親だけ、それも母親が多い）や偽装家族もきわめて広く見られた。移住候補者はすべて秘密裏に、犯罪者や危険人物の摘発を目的とした治安機関による審査を受けた。審査の結果、各州・共和国で旧東プロイセン移住希望者のうち一二パーセントまでがふるい落とされた。

もともと勤勉で訓練の行き届いた勤労者を選ぶようにという要請にもかかわらず、移住者の熟練度はきわめて低かった。一九四六年に州内最大企業の第八二〇号造船工場に採用された三六〇〇人のうち九五パーセントは、造船業で働いたことが一度もなかった。農業でも状況はまったく同じで、村には「希望すればだれでも、コルホーズ員のふりをしてやって来た。コルホーズ員ではなかったどころではない。法律家、医師、音楽家、技術者、教師だった」と、地元当局はこぼしていた。

移住者中でもっとも目立ったのは、ヒトラーによる占領地帯と化したロシア、ウクライナ、ベラルーシで焼き払われた農村や破壊された都市の住民だった人びとである。戦争で一家の大黒柱を失い、立て直しの力も資金もなかったかれらにとっては、戸建住宅かアパートを与えるという募集係の約束は、移住をすすめる格好の餌であり、納得する

カーニングラード地区へのソヴィエト移住者、1947-50年

出身共和国	移住者数 (千人)	比率 (%)
ロシア	253	64
ベラルーシ	35	9
ウクライナ	29	7
リトアニア	15	4
その他の共和国	53	14
合計	391	100

理由だった。多くの人々が、転居を決意することで自分と子どもを飢えから救い、新天地で生き抜くことに希望を抱いていた。移住者のなかには山師や犯罪者も多数含まれたし、それどころかいわゆる職業的移住者、すなわち特典を得るために何度も移住者登録をした人びともいた。金を使い尽くすと、姿をくらましてはまたもや何度も応募したのである。他方で、新規居住者たちは、同胞たちとは異なる積極的な特徴を身につけていた。フットワークが軽く、好奇心旺盛で進取の精神に富み、危険をおかす覚悟があり、そのうえ自由だった。

カーニングラード州に移住者をもっとも多くやってきたのはソ連の三つのスラヴ系共和国からだった。ロシア（六四パーセント）、ベラルーシ（九パーセント）、ウクライナ（七パーセント）である。さらに隣接するリトアニアからは約四パーセントが来た。農村地域での新規居住者の配分は「同郷」原則、すなわち同一地方出身者をまとめて居住させる原則を考慮して行われた。移住者中では、当初は女性が男性を約一・五倍程度上回っていた。移住者の典型は男性ではなかっただけではない。女性たちも未婚か、普通は一人ないし数人の子連れの寡婦だった。年齢構成では青年比率がきわめて高く、若年（一七歳まで）と老齢の集団ははるかに少なかった。こうした事情のおかげで死亡率が相対的に低い一方で、出生率はきわめて高くなっていった。こうしたことは、成立初期の州の住民に固有にみられたものだった。

居住場所と就労職種が変わったことは、おそらくカーニングラード新規居住者にもっともはっきりと見られた特徴のひとつだった。都市出身者と農村出身者がほぼ半々だったのだが、移住者の三分の一以上が仕事の性格や生活様

式を一変させたのだ。わかりやすく言うと、カリーニングラード州の各都市の住民はその四〇パーセントが「農民」出身者で占められていて、これはある程度、農村・都市間の移住にみられる一般的傾向に一致していた。ところが、全国規模で見ると、カリーニングラードの農村は独特の現象を示していた。農業などまったくわからない都市民の三分の一以上が農村住民として入り込んで、そのことが固有の問題を生み出し、長く尾を引くことになったのである。

移住者の大量流入のおかげで州の人口がもつとも急激に補填されたのは、一九四六年から一九五五年にかけてのことである。一九五〇年に住民数は五〇万人を超えた程度だったが、一九五〇年代中頃以降は基本的には自然増による成長が続いていた。もつとも、最近まで移住要因はある程度意味を持ち続けていた。移住者による逆向きの移住が高い水準で続いてきたのである。戦後最初の一〇年間にカリーニングラード州には一二〇万人が流入したが、八〇万人、つまり流入者数の三分の二が州外に舞い戻っていった。この時期に州内には、本質的には、恒常的な住民はいなかったためであり、条件付きで言うならば、住民の入れ替えが三回は行われたのだ。当然のことながら、このようなロケーションは、この地域への滞在は一時的なものにすぎないという感情にもとづく独特の心理を形づくり、そのことがある程度、カリーニングラードの人びとの心性として定着した⁽⁹⁾。

ドイツ人とその強制追放

東プロイセン住民の避難は、戦争末期、赤軍が国境に接近するのと同時に始まった。一九四五年三月から四月だけでも、東プロイセンから海路や鉄道で約三〇万人が避難させられた。移住の第二の波は、戦争終結後最初の数年間に生じた。この時、反ヒトラー連合の同盟国間の協定で、東欧・中欧諸国から事実上すべてのドイツ系住民を組織的に

移住させる事業が始まった⁽¹⁰⁾。ドイツ人歴史家は、ケーニヒスベルク「要塞警備」司令官のオットー・ラシユの回想を引用して、戦闘行動終結後も留まったドイツ人の民間人の数を、ケーニヒスベルクだけで一一万人程度と見積もっている。かれらの言によれば、その後の二年間でそのうち七五パーセント以上が死亡しており、生き延びた二万ないし二万五〇〇〇人だけがドイツへの強制追放に処せられた⁽¹¹⁾。ソヴィエト側のデータはこれとはまったく違っている。東プロイセンのうちソ連の手に渡った部分で軍政当局が一九四五年九月一日に実施した人口調査によれば、一三万九六一四人のドイツ人がとどまっていた⁽¹²⁾（軍人の捕虜は含まない）。この数値がどれほど正確かはいいにくいだが、飢えと寒さ、人口稠密や石炭不足、さらに好ましくない生活条件の結果生じた疥癬・腸チフス・発疹チフスなどのさまざまの疾病の大流行で生じた高い死亡率のために、急速に減少したことはわかっている。一九四六年から一九四七年にかけての冬季のドイツ人住民の死亡は、一カ月当たり四〇五〇〇〇人にのぼった。

生き抜いた東プロイセンのドイツ人は、戦争終結後にドイツに強制移住させられた中欧や南東欧諸国出身の同胞たちと運命をともにした。ただし、東プロイセンのソヴィエト部分からのドイツ人強制追放は、ただちに強行されたというわけではない。全体として当初はそうした行動は、ソ連指導部の計画にはなかったかのような印象さえある。大規模送還の開始は二〜三年遅れたのだが、これはなんとも実地的な判断によって説明可能だった。ソヴィエトの行政機関は、ロシアその他のソ連邦各共和国からの移住者が州に到着するまでは、地元住民の労働を利用するのが理に当たっていると考えたというわけだ。

これらのドイツ人の法的地位は定まらなかった。それは、戦後のドイツ全体の運命がはっきりしなかったのと同じである。おそらく当初は、これらの人々をソヴィエト国家に統合する路線が採られていた。このことは、ドイツ人児童のために四〇校以上の学校が開設され、ドイツ語で授業が行われていたという事実が証明している。『新時代』と

いう名のドイツ語新聞が発行され、一日二時間はドイツ語によるラジオ放送も行われ、ドイツ人クラブと呼ばれる文化施設も開設された。とはいえ基本的には女性、老人、子どもばかりで、おまけに衰弱状態にあったドイツ人住民は、地元当局にとつてますます厄介な重荷になっていて、このことが歴史的故郷への強制追放という決定を下す原因となった。さらに、国内を支配した共産主義者たちは、かつて敵であったドイツ人はソヴィエトの人びとに有害な影響を及ぼしており、ソヴィエト人はドイツ人と好ましくない関係を結んでいて、共産主義とは無縁の敵対的イデオロギーをもたらしっていると考えていた。⁽¹³⁾

一九四七年一〇月一日、スターリンの署名したソ連邦閣僚会議秘密決定第三五四七―一六九c号「ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国カリーニングラード州からドイツのソヴィエト占領地域へのドイツ人の移住に関する件」が採択された。一九四七年一〇月から十一月にかけて三万人のドイツ人を移住させる計画である。まず移住対象にされたのは、有用労働に従事できない子どもや病氣・高齢のドイツ人だった。一九四八年二月一五には二番目のソ連邦閣僚会議決定第三三三―一二二c号が採択され、これは州内に暮らしている残留ドイツ人全員を、一九四八年三月四月と八月一〇月の二段階にわけて移住させるよう定めていた。移住対象者には、私有財産を三〇〇キログラムまで持ち出すことが認められていた（実際は別ルールで動いていて、手でもてるトランクひとつだけ）。各地区での移住の組織化は作戦実施グループ（「トロイカ」）に委ねられており、これは内務省と国家保安省それぞれの地区支署長にくわえて地区執行委員会議長から構成されていた。

ドイツに強制追放されたドイツ人民間人の列車名簿が今日まで残されており、これはドイツ人人口調査の一次史料として唯一のものである。これらの名簿によれば、一九四七年から一九四八年にかけてカリーニングラード州からドイツのソヴィエト占領地区には四七編成の列車が送り出されており、一九四九年から一九五一年にはさらに三編成が

送られた。全体では、州内から一〇万二四九四人のドイツ民間人が移送された。⁽¹⁴⁾

改称キャンペーン

一九四六年夏までケーニヒスベルク州の古くからのドイツ語地名には事実上手がつけられておらず、そのことがこの地域の新規住民に困難をもたらしていた。ロシア語を聞きなれた耳には不慣れなドイツ語呼称を聞き分けて覚えることは難しかったのだ。ケーニヒスベルクの郵便配達人はほぼ例外なくドイツ人だったが、これは偶然ではない。街の地名を判別できたのは、かれらしかいなかった。イデオロギー的判断からも改称は必要だった。なによりナチスの過去と関わりのある呼称は、地図から抹消しなければならなかった。

すでに一九四五年一月に軍政当局の手で、ケーニヒスベルクの三七四の道路と広場について最初の改称が行われた。それらは「ファシスト指導者の名前に因んでいて、戦勝国民の当然の怒りをかっている」ことを考慮してのことだった（実際には「ファシスト的」呼称の道路は市内で二五本程度だけだった）。なかでもアドルフ・ヒトラー広場は、勝利広場に改称された。⁽¹⁵⁾

居住地名の改称キャンペーンは、州の中心地の名称変更から始めねばならなかった。ケーニヒスベルクは当初はバルティスクと呼ぶよう提案されたが、一九四六年七月六日に、スターリンの側近でソヴィエト議会「最高会議」議長であった故ミハイル・カリーニンにちなむ名称を得た。その後の数カ月には相次いで、旧東プロイセンの地名を全面的に変更する補足的な政令が出された。新名称の多くは、終わったばかりの戦争に関連したものだ。州内六都市が東プロイセンで亡くなったソ連邦英雄の名前（ネステロフ、グーセフ、チエルニャホフスタなど）を得た。それ以外に

は軍事的主題（クラスノズナメンスク「赤旗」、グヴァルヂエイスク「親衛隊」）や、社会主義的シンボル（ソヴェツク、ピオネールスク）に因んだものもあった。州の地図には共産党指導者やロシア人の司令官、作家、学者の名前が登場した。自然やその土地の特色のようなものに因んだ地名の与えられた居住地域もあった（バルティスク、ゼレノグラツク「緑の街」、オゼルスク「湖」）。改称委員会にとって、ソ連邦地図がまたとなく役立つ。移住者たちの出身地に因んで命名された村名もあったのだ（ウラジミロヴォ、モスコフスコエ、ヤロスラフスコエ）。まれな例だが、さらに命名の仕方があった。地名のロシア化がそれで、ドイツ語名と似た響きの名称をつけるのである。もつと稀な例では、ドイツ語からロシア語への地名の翻訳のような、もつとも合理的だと思える命名法も利用された。この場合、名称中に含まれた有益な情報、つまり人びとの暮らしや仕事に必要な目印を含むのが一般的のだが、そうした情報が残されていた。⁽¹⁶⁾

大規模なキャンペーンにより、何千件もの居住地や河川・湖その他の自然物、数万件もの広場と道路が新しい名称をつけられた。拙速でしかも地元の地理に通暁した専門家がいないために、同一のものや冴えない名称、イデオロギー的彩りの強い名称が多く見られることになった。多くの地名が重複使用されて、複数の村々が同一の名称をつけられることも多かった。最高記録は「ソスノフカ」で、一二の村々がこう命名されたのだ。もつとも具合が悪かったのは、何世紀もかけて定着し人びとに自然な目印の役割をはたしてきた旧称と違って、新名称は実にわざとらしくかったということである。旧称は、地元の特質や歴史的伝統、民族文化的な独自性を考慮したものだったからである。ちなみに、隣接するポーランドとリトアニアでは、改称キャンペーンはまったく違った形で進められた。これらの場合は、第一に、ドイツ語名に相当する独自の別名称が使われることになって、それらは数世紀にわたってドイツ語名と併用されてきたものだった。第二に、ドイツ語名称の一部が母国語に訳されたり、音韻的に適応させられたりしたのだ。

ドイツの歴史的・文化的遺産への態度

戦後初期のドイツ的な歴史と文化への態度は、宿敵であるドイツ・ファシズムにたいして広く見られた態度の影響を受けて形作られていた。ソヴィエトの人びとに多大の災厄（五年間の対独戦争によるわが国民の犠牲者は二六〇〇万人を数えた）をもたらしした不倶戴天の敵への憎悪である。この街の奪取後ただちに中央紙『プラウダ』に掲載されたケーニヒスベルクにかんする最初の記事は、「ケーニヒスベルクはドイツ犯罪史そのものであり、その長き生涯を通じて、この街は強盗として生きてきたのだ⁽¹⁷⁾」という一文から始まっていた。ファシズムへのこのような憎悪は、公式プロバガンダの後ろ盾を得たもので、ドイツ的なものすべてに及んでいた。そこから導かれる結論は、東プロイセンのドイツ的な文化と遺産にはまったく価値はなく、根絶可能どころかむしろ根絶しなければならない、ということであった。「プロイセン精神の追放」というスローガンが、そのための武器として盛んに活用された。この土地の歴史は新たに、白紙状態から始められなければならない。戦後初期には、この地域の戦争以前の過去に触れることは事実上全面的に禁止されていた。

下っ端の移住者たちは、目にしたものをまったく違ったふう⁽¹⁸⁾に受けとめた。ここでは何もかもが目新しく興味深く、もとの故郷とは驚くほど違っていた。街や村の外観にもひどく驚かされた。木造の建物はひとつもなく、あったのは赤瓦葺の切妻屋根や鋳物製で精巧な格子状の橋の欄干だ。丸石や煉瓦で舗装した道路、豊かな植栽、これまで見たこともないような花の咲きにおう、手入れの行き届いた庭も目に入ってきた。多くの人びとのお気に入り⁽¹⁹⁾の日課になったのは、地元の墓地を訪れることだった。美しい記念碑や銅像、納骨所を備えた公園のようだった。教会の聖堂

も似ても似つかぬものだった。おごそかで峻厳とも思える威容に圧倒されそうなほど壮大だったし、内部にはアイコンの代わりの像、オルガン、ベンチが備わっていた。無事に残ったアパートの部屋や邸宅に入居した人びとは、これまでとはまったくレベルの違う住居の快適さと出会って、ヨーロッパ的な日常生活のいくつかの要素をはじめて知った。ひどく破壊されていたにもかかわらず、堅牢さ、品質の良さ、清潔さ、秩序といった印象は残っていた。まさに「異国にやって来たみたい」だし、ここには「別種の人びとが暮らしていたのだ」と、多くの人びとが感じていた。

「プロイセン精神の追放」をめざす当局の方針の不愉快きわまりないあらわれは、スターリン死後には克服された。最初はごくわずかだったが、国家による保護下に置かれるようになり、その後は何十、何百ものドイツ風の建物と建造物、芸術的な記念物がこれ続いた。当局が修復や再建のための予算をつけるようになった。だが、地域の戦前の歴史への禁令が最終的に解かれたのは、一九八〇年代後半のベレストロイカ開始以降のことだ。

戦後、「記念碑」「歴史記念物」「文化記念物」といった概念は、ソヴィエトの戦士たちの墓所にのみ用いられてきた。ドイツ的な記念碑は撤去されて、改鋳された。わずかに無事に生き残ったものもあるが、そのひとつはドイツの偉大な詩人であるフリードリヒ・シラーの記念碑で、いまま街中心部の劇場前にあるかつての場所に立っている。世界的に著名な一八世紀ドイツの哲学者イマヌエル・カントの墓碑も保存されてきた。かれは、生涯をケーニヒスベルクで過ごし、「地元の偉人」となった。その後この墓碑は修復されて、いまではカーリーニングラードの主要名所のひとつとなっている。破壊された記念碑の素材がソヴィエト的モニュメントの製作に使われることもよくあった。ケーニヒスベルク大学本館前に建立されていたカントのもうひとつの記念碑もそうした運命をたどった。戦後、哲学者の像は撤去され、みごとに大理石製の台座がドイツ人共産主義者のエルンスト・テールマンの胸像を置くのに用いられた。共産主義崩壊後にテールマンが台座から引きずり降ろされる一方、カント像が改めて青銅で铸造され、「故郷」

の台座上に建立された。

かつて王城は東プロイセンの主要名所で、これもまたケーニヒスベルクの建築物の奏でる旋律の中心音の役割を果たしていた。城はかなりひどく破壊されてはいたが、それでも再建可能な状態だった。一九五〇年代の公的議論のなかでは多くの市民が、将来の修復のためにこの壮大な建築物を保存するのに賛成していた。ドイツ人研究者であるベルト・ホッペの見解によれば、城の運命をめぐる論争は「実際は、この地域のドイツ的歴史にたいする態度をめぐる軋轢であり、地域アイデンティティの形成に関する問題群の全体にかかわっていた」⁽¹⁹⁾。しかしながら共産党政権は城の撤去を決定し、一九六八年に爆破された。

一九七〇年台から八〇年代になると、全国的な歴史の語りのなかで、第二次世界大戦におけるソヴィエト人民の勝利にますます重要な位置づけがなされるようになった。まさにカリーニングラード州でも、新しい儀式や共同想起の実践⁽²⁰⁾がうってつけのかたちで挙行された。新方針は、ファシズムへの勝利とソヴィエト戦没軍人を記憶するための多数の軍事記念碑やメモリアルの創設という形をとった。州内には今日までに合計二二〇ものこの種の記念碑が設けられており、それにはカリーニングラード市内に四八ある軍事メモリアムも含まれているのだが、この数字はロシアの他のどの都市よりも多い。

一九八〇年代後半のゴルバチョフによる「ペレストロイカ」、イデオロギー的ドグマの緩和、グラスノスチ「公開」政策の開始とともに、カリーニングラード州でも、この地域の戦前の歴史への禁令が完全に撤廃された。学校や大学でも戦前の歴史が学ばれるようになったし、学術集会やセミナーも開催され、ケーニヒスベルクと東プロイセンの過去についての歴史的な労作も少なからず登場した。一九九四年にカリーニングラードの人びとは、名高いケーニヒスベルク・アルベルティーナ大学の四五〇周年をおごそかに祝ったし、現代的でロシア的なカリーニングラード大学

のキャンパス内には、ケーニヒスベルクの偉人であるイマニユエル・カントの記念碑がふたたび登場した。⁽²¹⁾

二〇世紀から二一世紀にまたがる最大の偉業は、大聖堂の復興である。一九九〇年代初めまで廃墟と化していたものが、今日では、現代カリーニングラードのシンボルともいうべき大切な建築物になったのだ。大規模な作業が、ロシア、ポーランド、リトアニア、ドイツの専門家の参加を得て六年がかりで行われ、修復作業はいまも続いているとはいえ、一九九八年には復興のなった大聖堂の建物内に博物館が開設された。

カリーニングラード州内では今日までに、九四〇件の歴史的文化財が国家による保護対象一覧に登載されているが、そのうち二五件は連邦レベルで意義を認められた記念物、三九〇件は州レベルで意義を認められたものである。それ以外の五二五件は、市町村レベルの意義を認められている。それらのうちほぼ八〇パーセントは、戦前のプロイセンやドイツ的な過去に関連するもので、文化遺産のうち最近七〇年間のソヴィエト／ロシア史に関連するものは五分の一にすぎない（これらは基本的には軍事的な記念物である⁽²²⁾）。

ソ連解体と外国人へのカリーニングラード州の開放により、約半世紀の歳月を隔ててふたたび、ドイツ人被追放民が生地を訪れることが可能になった。一九九〇年代初頭にカリーニングラードの人びとは初めて、「ノスタルジー」を抱いたドイツからの旅行者の姿を目撃し、かつての故郷の痕跡を探し求めてこの地を訪れた高齢の人びとの語る胸を打たれるような、恐ろしい物語を耳にすることとなった。こうした非公式の接触はカリーニングラードの多くの人びとに、自分たちの地域を新たな目で見直させることとなった。かつてこの地はドイツだったという抽象的な知識が、突然、目に見える形で確認されたのだ。

過去に思いをめぐらす際の重要な一契機となったのが、二〇〇五年のケーニヒスベルク／カリーニングラード七五〇周年祭典である。この記念行事が示したのは、カリーニングラードでは、この故郷の街の歴史を「自分たちのもの

の」と「他人のもの」に分けようとする人びとはますます少なくなっているということである。そして、どんなものであれ有意義な社会活動全般がそうであるように、自分たちのこの小さな故郷をもっと住みやすくする事業は、先人や隣人たちの経験に配慮し、これらを活用せずにはなしえないとの信念がますます強まっている。この出来事は、新生ロシアのヨーロッパ的選択をはっきりと示すものとなった。この頃、カリニングラード大学がドイツ人哲学者イマニエル・カントの名前に因んで改称したのは偶然ではない。カントは、ロシアでそのような榮譽に浴した唯一の外国人なのである。

追記 この翻訳と解題は、二〇一三―二〇一五年度日本学術振興会科学研究費補助事業（課題番号二五二八四一四九）による研究成果の一部である。

注① 橋本伸也「カリニングラード形成史研究序説」、ユーリー・コスチャシヨーフ（橋本伸也訳）「ドイツ人追放」とともに『ロシア・ユーラシアの経済と社会』第九四八号、二〇一一年八月

② Юрий Костяшов Поселенность послевоенной деревни : Из истории переселенческих колхозов Калининградской области 1946-1953 гг. М., 2015. С.10-12.

③ 出版にいたる経緯は以下を参照。В. И. Гальцов История Калининградской области в документальных публикациях//В. И. Гальцов и др. (отв. ред.) Калининградской области - 60 : этапы истории, проблемы развития, сборник статей. Калининград, 2006. С.6-7. 各言語で刊行されたものは以下のとおり。Костяшов ЮВ. и др. Восточная Пруссия глазами советских переселенцев : Первые годы Калининградской области в воспоминаниях и документах. СПб., 2002. Als Russe in Ostpreußen : sowjetische Umsiedler über ihren Neubeginn in Königsberg/Kaliningrad nach 1945//Eckhard Mates (Hrsg.) Aus dem Russ. Von Aime Ackermann Ostfildern, 1999. Przesiedleńcy orowiadają. Pierwsze lata Obwocku Kaliningradzkiego we wspomnieniach i dokumentach/ Praca zbiorowa pod redakcją Jurja W. Koszjaszowa. Wydanie polskie przygotował Tadeusz Baręta. Wydawnictwo Wac-

- law Hojszka/*Rozprawy i Materiały Ośrodka Badań Naukowych*. Nr.192. Olsztyn, 2000.
- ④ Юрий Костяшов Секретная история Калининградской области : Очерки 1945-1956 гг. Калининград, 2009.
- ⑤ たとえば、以下の著作を参照。佐藤成基『ナショナル・アイデンティティと領土―戦後ドイツの東方国境をめぐる論争―』新曜社、二〇〇八年。近藤潤三『ドイツ移民問題の現代史―移民国への道程―』木鐸社、二〇一三年。ノーマン・M・ナイマーク（山本明代訳）『民族浄化のヨーロッパ史―憎しみの連鎖の―』刀水書房、二〇一四年。Petti Ahonen, *After the Expulsion : West Germany and Eastern Europe 1945-1990*. Oxford University Press, 2003. Hugo Service, *Germans to Poles : Communism, Nationalism and Ethnic Cleansing after the Second World War*. Cambridge University Press, 2013.
- ⑥ Adrian von Arburg et al., *Als die Deutschen weg waren : Was nach der Vertreibung geschah : Ostpreußen, Schlesien, Sudetenland*. Berlin, 2010, S.283-309.
- ⑦ ロシアの国家的な歴史政治の様相と含意については、拙著『記憶の政治―ヨーロッパの歴史認識紛争』（岩波書店、近刊予定）を参照（S.114）。
- ⑧ Olga Kupilo (Hg.), *Mobilität und regionale Vernetzung zwischen Oder und Memel : Eine europäische Landschaft neu zusammengesetzt*. Berlin, 2011. Juri Kosjafov. Olga Kupilo i Piotr Zaitczulj (red.) *Granice i ich rokowawanie na obszarze niemiecko-polsko-rosyjskiem*. Toruń 2012. Юрий Костяшов и Ольга Курило (ред.) Между Одером и Неманом : Проблемы исторической памяти. Калининград 2012.
- ⑨ Ушу Костяшов, Trialog : the experience of cooperation of the universities in Kaliningrad, Torun and Frankfurt (Oder) in the pamphlets, in Nobuya Hashimoto (ed.), *Politics of Histories and Memories and the Conflicts in Central and Eastern European Countries and Russia*. Nishinomiya, 2014 (<http://hdl.handle.net/10236/13007>)
- (1) O.A. Жгешевский Визит А. Идена в Москву в декабре 1941 года//Новая и новейшая история. 1994 No.2. С.100.
- (2) Тегранская конференция трех союзных держав - СССР, США и Великобритания. 28 ноября - 1 декабря 1943 г. Москва 1984. С.150.
- (3) Переписка Председателя Совета Министров СССР с Президентами США и Премьер-министрами Великобритании во

- время Великой Отечественной войны 1941-1945 гг., т. 1. Москва 1989. С.237.
- (4) Берлинекая (Поглемская) конференция руководителей трех держав - СССР, США и Великобритания. Москва 1984. С.438.
- (5) Vgl., K. Dieckert und H. Großmann, *Der Kampf um Ostpreußen, Veltheim-Schnellbach* 2010 ; G. Nörst, *Die Zerstückung Königsbergs-Eine Streitschrift*, Berlin 2014.
- (6) Восточная Пруссия глазами советских переселенцев. Первые годы Калининградской области в воспоминаниях и документах. Санкт-Петербург 2002. С.43-52.
- (7) В начале нового пути. Документы и материалы о развитии Калининградской области в годы деятельности чрезвычайных органов управления. Калининград 2004. С.94-98.
- (8) Ю. В. Косляшов Формирование трудовых ресурсов Калининградской области в ходе массового заселения в послевоенные годы//Миграция и социально-экономическое развитие стран региона Балтийского моря. Калининград 2008. С.354-365.
- (9) Ю. В. Косляшов Заселение Калининградской области после Второй мировой войны //Гуманитарная наука в России. Т. 2. Москва 1996. С.82-88.
- (10) M. J. Proudfoot, *Evicted refugees : 1939-1952*, Evanston, 1956, pp.368-370.
- (11) O. Lasch, *So fiel Königsberg*, Stuttgart 1976, S.116, 127 ; R. Neumann *Ostpreussen unter polnischer und sowjetischer Verwaltung*, Frankfurt am Main 1956, S.97-98.
- (12) Очерки истории Восточной Пруссии. Калининград 2002. С.456-459.
- (13) Vgl., P. Wörster, *Das nördliche Ostpreußen nach 1945. Verwaltung, Bevölkerung, Wirtschaft, Märkte* 1978 ; G. Luschkat, *Die Lage der Deutschen im Königsberger Gebiet 1945-1948*, Frankfurt/Main 1996 ; V. Frobath, *Das Königsberger Gebiet in der Politik der Sowjetunion 1945-1990*, Berlin 2001.
- (14) Ю. В. Косляшов Выселение немцев из Калининградской области в послевоенные годы//Вопросы истории. 1994 No.6. С.186-188.

- (15) A. B. Губин. Топонимия Калининграда/Калининградские архивы. 2003 No.5. С.139-196.
- (16) И.Е. Кривоулицкая. Кампания переименований 1946-1947 годов/Калининградские архивы. 1998 No.1. С.90-106.
- (17) Правда. 13 апреля 1945 г.
- (18) Восточная Пруссия глазами советских переселенцев. Первые годы Калининградской области в воспоминаниях и документах. Санкт-Петербург 2002. С.158-161.
- (19) B. Norre. *Auf den Trümmern von Königsberg. Kaliningrad 1946-1970*. München 2000, S.128.
- (20) 首都や共和国・州の中心における五月九日の軍事パレードの挙行。大都市での「無名戦士」記念碑や「永遠の火」メモリアルを設置、「記憶のための奉仕活動」。「一九四一年六月二二日の独ソ戦開戦を想起して、戦没者や戦後復興に活躍した人々を追悼する行事」の遂行、献花、集会。「黙祷」。「五月九日午後六時五五分に一斉に行われる戦没者追悼儀式」等々。
- (21) P. Brodersen. *Die Stadt im Westen. Wie Königsberg Kaliningrad wurde*. Göttingen 2008.
- (22) A.M. Трунов (ред.) Объекты культурного наследия Калининградской области. Москва 2013. С.129-164.